

室町期摂津国西成郡における細川氏の在地掌握

——嘉吉・文安年間の崇禪寺との関係を通して——

小 山 明 彦

はじめに

中世後期における摂津国は京都を包摂する山城国と並び最重要国である。それは淀川水系や西国街道といった京都に繋がる交通路を有していたからである。なかでも摂津国西成郡は平安期より渡辺党を中心に京都へ結ぶ舟運を擁し、大阪湾港の発達により全国各地の物資が集積する畿内流通の中心地として発展しており、政治・経済的に重要地であった。しかしこのような要地・西成郡の支配体制、特に地域権力が発達した室町期を対象とした先行研究は今谷明氏^①の考察しか目立っていない。また西成郡のみならず摂津国支配研究においても過少である。

近年、中世後期の地域権力研究において末柄豊氏^②、森田恭二氏^③、古野貢氏^④が細川氏権力論を、天野忠幸氏^⑤が三好氏権力論を精力的に研究され、その考察過程で摂津支配研究が飛躍的に進展した。しかし三好氏権力研究は勿論のこと、細川氏権力研究においても考察対象は政元期以降の戦国期に集中しており、室町期については事実確認程度に止まっている。室町期摂津支配研究の停滞が続いているのは摂津国が分郡守護制であり、支配体系が一元化されていない特異性が起因すると考えられる。室町期、摂津本郡守護に補任された細川氏は当初全十二郡中四郡半（島上・島下・豊島・八部・川辺郡南部）の管轄を認められたが、残りは京極・赤松・山名・畠山・大内氏がそれぞれ

分郡を守護していた。^⑥ 細川氏はこれら他守護家の分郡を解消し本郡への吸収を徐々に実現していくのであるが、このような摂津国を取り巻く複雑な状況が摂津支配研究を困難なものにしている。しかし畿内の要国であり、有力守護家が関与した摂津支配研究の停滞は当該期の畿内地域支配及び室町幕府―守護間の政治動向や権力序列について正しく位置付けすることができない。停滞している室町期の摂津支配研究を進展させるには本郡守護・細川氏の支配政策を明らかにする必要がある。そこで本稿では細川氏の摂津支配政策のひとつとして、要地・西成郡掌握へのアプローチを論考の対象とする。

細川氏は嘉吉の変を契機に西成郡の管掌権を持つようになるが、当初は西成郡在地社会に対する影響力は脆弱かつ不安定であった。当郡の掌握には在地社会の支持と影響力の浸透性が必要で、それを獲得するべく細川氏は嘉吉・文安年間において様々な動きを展開していった。そこで大きな鍵を握ったのが崇禅寺との関係である。本稿では崇禅寺関係文書を論考の史料として用いることで細川氏と崇禅寺の関係を読み解き、細川氏がどのように西成郡の在地政策に関与し、その影響力を行使したのかという点について考察していく。

第一章 室町幕府の西成郡御料所化政策

分郡守護体制を敷いていた摂津国に細川頼元が摂津本郡守護として任命された永徳三年（一三八三）時の西成郡分郡守護は赤松義則であった。以後一部の例を除き西成郡守護は代々赤松氏が担っていた。^⑦

しかし嘉吉の変を契機とする室町幕府への謀反により赤松氏は誅伐され、播磨以下の守護国を失ったことは周知の事実である。赤松氏の旧領は赤松討伐に戦功のあった山名持豊に播磨・美作・備前が与えられたが、摂津西成郡は將軍家御料所に留め置かれた。^⑧ このような措置は關所となった西成郡を誰に宛行うかという問題が幕府内で重大な懸案となって現われたことを意味した。それは西成郡が政治的に重要な地域という認識を幕府がもっていたため

である。本章では、まず赤松氏誅伐を契機に再編された摂津西成郡を、室町幕府がどのような政治方針をもって事に当たっていたのかという点について検討していく。

ここに赤松氏討伐後の幕府による御料所補任を記した記事がある。

【史料1】

(赤松満祐)

一、性具分国補任人数

(中略)

摂州中嶋郡為御料所、

細川右馬助持賢法名道賢⁽⁹⁾

摂津西成郡は当時「中島郡」とも呼ばれていたので、【史料1】から幕府は細川持賢を西成(中島)郡の御料所代官に補任したことが分かる。

細川持賢は管領細川持之の弟で次期京兆家当主勝元の叔父に当たる人物で典厩家の当主であった。典厩家は細川一族として京兆家を補佐する役割を担うとともに、將軍御供衆を務めており、室町幕府機構の構成員としても存在する家流を保持していた。⁽¹⁰⁾

つまり幕府は細川家庶流ながら將軍近習である典厩持賢の存在に着目し、彼を御料所代官に付すことで西成郡管掌を図ったのである。この人事について古野貢氏は、「応永十七年(一四一〇)に、幕府内で細川氏と対抗していた斯波義将の死によって、細川氏の幕府内での地位が上昇し、その後の嘉吉の変での論功により西成郡を得た」と論じている。また管領が細川持之であり、義教横死後は彼を中心に幕府が運営されていたことも一因だったといえ

よう。^⑪

但しこの場合の持之は管領という地位を背景に恩賞宛行を行っており、あくまで幕府内の有力守護家たちとの合議のもとで決定したのである。そこには守護家間の勢力均衡を保つため、細川京兆家の西成郡管掌を避けさせる代わりに將軍近習の細川持賢に管掌させるといふ、守護家間の牽制と妥協が図られた措置だったと考えられる。しかし、なぜこのような措置が採られたのであろうか。それは当時の室町幕府の政治体制と細川氏の幕府内権力序列が関係していたと考えられる。

十五世紀以降、有機的に運営された政治体制は、將軍権力と幕閣主要守護家集団が相互補完する「室町幕府―守護体制」であった。室町幕府―守護体制が最も円滑に運営されていたという、義教期における將軍と守護家集団の関係を確認してみると、天下の成敗は「室町殿ノ御意」^⑫として動く將軍固有の権限とみなされ、この將軍の意思を「上意」と表現して天下成敗権を司り、一方の守護家集団は「衆議」と表現され、「御政道等事一方ノ意見者」として、「宿老之間、天下事以諫言被申沙汰」^⑬立場で將軍を支えていた。当時の幕閣によるこの認識が「室町幕府―守護体制論」の根拠として論じられるのである。衆議が將軍を支えたのは各地域における守護の自立性を獲得するため、將軍より分国支配の正当性の保証を必要としていたからで、上意と衆議は相互に依存しあう関係が成り立っていたのである。室町幕府―守護体制は武家的には、「天下成敗権」を保有する室町幕府（將軍）と、幕府に対する求心性と自立性の両側をもち、「分国成敗権」を保有する幕閣主要守護家の相互補完により、中央と地方を統治していく政治構造として一定の安定をもたらしていたのである。^⑭

次に有力守護家細川氏の幕府内における権力序列をみてみよう。細川氏は室町幕府草創期より一族がまとまって尊氏・義詮を支え、その功績が認められて足利一族の名門斯波・畠山氏とともに三職を形成し、以後幕閣の重鎮として交替で管領を務めた。三氏の権力序列はその時々々の政治情勢や將軍との関係性によって変動している。

康暦の政変で管領細川頼之を失脚させ、細川氏の影響力を排除した將軍義満は、自らの主導権を確立させたといわれるが、当時の南北朝間の政治情勢から山名氏に最大十二ヶ国もの分国を与え、権力の集中を許していた。幕府は衆議間の均衡を回復するため、山名氏の権勢を削ぐ動きをみせた。そこで義満が起用したのが自ら排除した細川氏の再登用であった。山名氏を討つためには細川氏の力が不可欠であったため京兆家当主頼元を管領職に据え、再び幕府に復帰させた。また、山名氏に権力が集中する間の永徳三年（一三八三）、摂津本郡守護を細川頼元に補任したのは義満が山名氏の強大化を牽制し、対抗するための処置であったと考えられる。このように草創期から義満期にかけては、幕府内外の政治情勢によって権力序列は変化したのである¹⁶。

一度失脚の憂き目にあった細川氏は幕府内の権力序列の変化に対処すべく、他守護家と一線を画した細川氏権力構造及び分国支配編成を構築することになる。細川氏の分国は義持期に確定し、その内訳は京兆家分国として摂津・丹波・讃岐・土佐が、細川氏庶流守護分国として阿波守護家・和泉守護家・備中守護家が、それぞれの分国を確定した。細川氏の分国を大別すると、摂津・丹波・和泉の畿内近国と讃岐・土佐・阿波・備中の地方に分かれていた。そして細川氏は同族連合体制を敷いていることから細川氏全体として守護分国を管轄する視点をもっており、このことから分国支配において、中央と地方の結合を必要とし、新たな権力構造を築いたのである。この細川氏同族体制を、古野氏は京兆家を頂点として、京兆家と庶流家が結合する体制で、まさに中央と地方の相互補完を意識した室町幕府―守護体制の構造的特質を体现したものと評価している¹⁸。また、幕府側としても室町幕府―守護体制を体现する細川氏権力構造を歓迎しており、そのため細川氏は幕府内における他守護との権力序列を有利に進めることができたのである。

このような細川氏の幕府内における優位性を背景にして、細川典厩家は西成郡御料所代官に補任されたが、この措置にはもうひとつ大きな意義があった。それは幕府の主要守護家・細川氏が関与することで、幕府・細川氏が互

い存在を補完しながら西成郡統治をすすめることを前提としたことである。これは前述の「室町幕府―守護体制」の原則を反映させた統治方法である。

「室町幕府―守護体制」においては「上意」と「衆議」が相互に規制しあう関係でバランスを保っていたが、嘉吉の変により「上意」が不在となり、「衆議」のみが残るかたちとなってしまった。

【史料2】

(足利義勝)

一、若君様、伊勢守貞国許御座候間、同日管領右京兆被馳参御警固申了、其後被成將軍之宣旨、則花御成御移也、

(中略)

一、御政道事為御代官、於管領右京兆之許被執行之、⁽¹⁹⁾

この史料は足利義勝の將軍宣旨と管領細川持之が「御政道」の「御代官」として幕府政治を「執行」することを記したものである。義教暗殺後、「衆議」により管領細川持之が新將軍義勝の成人まで「上意」を代行することが決定したのである。西成郡の処遇について討議された時の持之は「衆議」の一員でありながら「上意」者であった。つまり、この時点での室町幕府は細川持之の「上意代行」と有力守護の「衆議」の相互補完体制によって運営されていたことになる。

嘉吉元年における細川持賢の西成郡御料所代官補任はこのような「嘉吉の新体制」が反映されたものであるが、西成郡においては「衆議」の室町幕府と「上意代行」の資格を有する守護細川氏の相互補完体制、いわば変則的「室町幕府―守護体制」というべき支配体制によって御料所代官支配がすすめられたのであった。これは幕府方の

「衆議」が優位に立ちつつも細川氏の影響力を必要とした現われであるが、幕府による措置という側面が強かったということは、従来語られている細川氏の分郡守護の獲得といったレベルに達するものではなかったといえよう。

また、幕府は淀川の対岸に位置する河内十七ヶ所も御料所に指定していた⁽²⁰⁾。これは西成郡とともに淀川の水上交通を室町幕府が掌握するという意思を示すものであった。よって、嘉吉元年（一四四一）における西成郡の処遇は変則的「室町幕府―守護体制」のもとで、この地域の支配強化を指向した室町幕府の政權運営方針の意思の表われだったのである。この西成郡の御料所化が幕府の指針によるものだったとはいえ、細川典厩家が西成郡代官に就任したことは大きな意味をもった。次に、このような室町幕府の方針に対する細川氏の在地政策について検討してみよう。

第二章 西成郡管掌体制の確立

細川持賢の西成郡御料所代官就任により、有馬郡を除く摂津国の統治権を手にした細川氏は堺・兵庫の二大貿易港を保持した上で、もともとの守護国である淡路・和泉を含めた大阪湾沿岸一帯の統治権及び経済的権益の掌握が可能となった。

しかし嘉吉二年（一四四二）八月、細川持之の死去により管領職は細川京兆家から畠山持国へと移り状況は一変する。このことは細川氏の「上意代行」の地位の喪失を意味し、「幕府御料所代官職」として獲得した西成郡管掌権安泰の保証が無くなったことを示した。細川氏及び西成郡において失態を犯せば、当地改替の危険性を孕んでいたのである。西成郡管掌権を盤石のものにするためには支配体系の基盤を構築することが先決であった。

守護国を支配し、維持していく上での重要な事案は、守護代の任命である。西成郡においては「幕府御料所代官」であることから厳密には「守護代」という職制は存在しないが、実質的には守護代を担う職制を細川氏は創設

した。史料上、新たに示される用語は見当たらないが、守護国との区別化のため本稿では「小代官」と規定する。西成郡小代官は始め安富盛行⁽²¹⁾を据えていたが、ほどなく長塩宗永⁽²²⁾が付されている。彼らはいずれも京兆家内衆であった。持賢は「幕府御料所代官」に付けられたが、支配体系において補佐役となる小代官に京兆家内衆を起用したのである。

永徳三年（一三八三）、摂津本郡守護に細川頼元が補任され、摂津本郡における在地支配の要として守護代が置かれた。初代摂津守護頼元期にみえる守護代は長塩・庄・内藤氏等が務めた。⁽²³⁾この三氏の出自をみると、内藤氏は丹波皆地、庄氏は備中草壁郷、長塩氏は阿波坂東郡に基盤を持つ有力国人で三氏とも細川宗家（後に京兆家と称される）譜代の扱いをうけていた有力内衆である。いずれも他国出身であったが細川氏の摂津守護草創期に彼らが守護代に補任されたのは頼元が摂津守護代家格を細川宗家有力内衆に固定する意思をもっていたからと考えられる。頼元は永徳三年（一三八三）十月から応永四年（一三九七）五月までの約十四年間摂津守護職を務めていたが、その間に彼らは奈良又四郎を含め交替で守護代を務めていた。彼らそれぞれの在職期間は短かったが、頻繁に交替を繰り返したことで有力内衆のみが守護代職の有資格者であることを摂津国内に宣言したといえよう。頼元の狙いは守護代の家格を細川宗家（京兆家）内衆に限定することで、分国内に細川氏の影響力を浸透させるためだったと考えられ、以後も摂津守護代職は京兆家内衆が務めたのである。西成郡においてもこれと同じように、守護代に相当する「小代官」に京兆家内衆を起用したのは、西成郡管掌に細川氏の意思を浸透させるための意図が働いていたものと考えられる。そして特に注目すべきことは京兆家最有力内衆・長塩宗永の起用であった。

嘉吉元年（一四四一）四月の長塩備前入道（宗永）宛て細川持之遵行状⁽²⁴⁾及び同年六月、念仏寺住持宛て長塩宗永遵行状⁽²⁵⁾では摂津住吉郡堺北庄における反銭以下免除を命じ、また文安三年（一四四六）には摂津道祖小路・天王寺・木村（東生郡）、住吉・遠里小野（住吉郡）の油商売停止を命令する守護遵行状⁽²⁶⁾が下されていることから、当

時の東生・住吉郡の守護代は長塩宗永だったことが分かる。そして嘉吉三年（一四四三）五月段階には西成郡小代官は同じく長塩宗永が務めており、このような事実は持賢の西成郡代官職補任に対して、細川氏が一族の問題として捉え、この代官職を幕府から改替されない体制づくりに着手していたことを窺わせるものであった。

嘉吉年間当時、代官細川持賢及び小代官長塩宗永は在京していたと考えられる。それは、細川氏において守護及び守護代は在京することが慣例となっていたためであるが、持賢としては將軍御供衆としての務めも継続しており、この二つの職掌が重なっていたものと考えられる。この状況で京兆家内衆の長塩宗永を西成郡の小代官に任命したことは、細川氏が「幕府御料所代官」の任務ではなく、分郡守護としての管掌を志向していたことを示すものであった。「上意代行」の喪失が細川氏権力に危機感を与えるとともに西成郡管掌の強化方針を鮮明に打ち出させたといえるのである。

今谷明氏は西成郡の支配体制を「分郡守護―守護代―小守護代―島中代官」の四ランクの下、支配が行われていたことを明らかにした。⁽²⁹⁾在京していた持賢及び宗永は地域統括者として「小守護代」を設置し、荘園や田畠等の当該地の管理者として「島中代官」をその下に置いたというのである。

しかし、このような今谷氏の理解は概ね従うべきであるが職制名称に疑問が残る。それは今谷氏が位置付けた四つの職制名称が持賢の分郡守護獲得の理解のもとに表現されていることである。既述したように西成郡は幕府主導による御料所代官補任であった。よって西成郡の場合は「御料所代官―小代官―又代―島中代官」と表現した方が適切ではないだろうか。本稿では西成郡支配体制における四つの職制名称を幕府御料所指定という観点から、このように仮称する。次は実際に在地管掌に関わる又代・島中代官の活動と細川氏の在地掌握への動きについてみてみよう。

幕府内の「衆議」により、西成郡御料所代官となった細川持賢は就任に際し、故義教の菩提を弔うために中島の

地に崇禪寺を建立した。赤松満祐が義教殺害後、京都から播磨に帰る際に義教の首を安置したという観音堂一帯の地に建てた寺である。⁽³⁰⁾

嘉吉・文安年間を中心に崇禪寺の状況を伝えている『崇禪寺支証目録』をみると、細川氏権力による崇禪寺への関与を伝える文書が多数残存している。⁽³¹⁾

【史料3 A】

摂津国中嶋惣社領松原内壱町四方此外<sup>東御敷地堀ヨリ伍丈
西東堀通 北庄堺井路</sup>事、為崇禪寺敷地渡進上申者也、(後略)⁽³²⁾

【史料3 B】

崇禪寺御寄進在所事

一所福嶋村内木村跡 一所同遠蔵新左衛門跡

一所同 平田跡 一所渡辺国分寺内平田跡

一所野田村平田跡 一所福嶋村内塚田同<sup>浦野
波佐間</sup>跡

(後略)⁽³³⁾

【史料3 A】は中島惣社の松原内一町四方を崇禪寺の寺地に充てるといふ文書で、【史料3 B】に明記されている「木村」、「遠蔵新左衛門」、「平田」、「浦野」、「波佐間」は赤松氏被官の面々であり、この跡地を崇禪寺に寄進すると記した文書である。その他にも『崇禪寺支証目録』には「中嶋内乳牛牧闕所分」⁽³⁴⁾や「中嶋内福嶋村闕所分・同散在等」⁽³⁵⁾を崇禪寺に「御寄進」するといふ文書が残されており、これら文書の内容から、中島惣社内の松原一帯を崇禪寺の敷地とし、「勤行料所」⁽³⁶⁾として旧赤松領闕所分及び散在地を崇禪寺に寄進したことが分かる。このように

嘉吉年間より細川氏は崇禪寺と深く関わっているのである。

『崇禪寺支証目録』を検証すると当時の西成郡支配体制の骨格が浮かび上がってくる。西成郡小代官安富盛行（嘉吉二年時）、長塩宗永（嘉吉三年時）が発行した遵行状が残されており、いずれも崇禪寺への寄進についての内容である。宛所は勝田賢正と一宮（小笠原）成実の二人に限られており、崇禪寺に関する重大案件に関わっていることから彼ら二人が又代だったと考えられる。³⁷翌文安元年（一四四四）には小河賢家より勝田・一宮それぞれに遵行状が下されている。内容も中島内崇禪寺領の段銭免除であるから、これが小代官の遵行状であることが分かる。小河氏の詳細は不明であるが内衆の奉行を務める京兆家被官と考えられ、³⁸先任の安富・長塩氏が京兆家有力内衆という事実と合わせると、先述したように西成郡小代官は京兆家有力内衆ないし内衆に准じる被官（奉行人）の職掌下にあったことをさらに裏付けるのであった。

小代官より下された遵行状を見ると、崇禪寺への寄進地が記されており、その地名から勝田賢正と一宮成実などの地域を担当していたかが分かる。勝田賢正への遵行状は二通あり、寄進される地は「中嶋内乳牛牧關所分并仏性院公文職事」や「中嶋内柳嶋」である。⁴⁰一方の一宮成実への遵行状は三通あつて、「中嶋内福嶋村關所分・同散在」や「中嶋野里庄内高德庵跡」、⁴³「中嶋野里庄内浄心跡」⁴⁴の地が寄進されていたのである。このように勝田氏は「乳牛牧」や「仏性院」、「柳嶋」の地を統括しており、一宮氏は「福嶋村關所分・同散在」や「野里庄」の地を統括していた。

「乳牛牧」は現在の大阪市東淀川区大桐付近一帯に広がっていた牧地で、「仏性院」はＪＲ東淀川駅東北にある大願寺の前身の寺院である。⁴⁵「柳嶋」は「無主地」であることから、元々耕作のできない不毛地が形成された新開発地であるといえよう。文安四年（一四四七）六月六日付の「崇禪寺領目録并室町幕府下知状案」⁴⁶に中島崇禪寺領の中に「江口内柳嶋」が記載されていることから、「柳嶋」は東淀川区江口一帯に位置していたと推定できる。

次に一宮氏の統括地についてであるが、「福嶋村」は現大阪市福島区の中心部に位置し、赤松氏被官の木村・遠藤・平田・塚田・波佐間氏の跡地が残された一帯であった。「野里庄」は福嶋村より西方の現大阪市西淀川区に位置する荘園地帯である。福嶋村はこれら闕所分が、野里庄は高德庵と浄心の跡地が崇禅寺に寄進されていたのである。また嘉吉三年（一四四三）四月には、一宮成実が「中嶋渡辺国分寺内幸宝寺」を「為崇禅々寺御末寺、所御寄進之也⁽⁴⁷⁾」とする打渡状を下していた。「渡辺国分寺」についても一宮成実が管轄する地域であったことが分かる。「渡辺国分寺」は現在の大阪市北区国分寺一帯に位置していたと考えられる⁽⁴⁸⁾。

このように二人の管轄地を検討すると勝田氏は現大阪市東淀川区を中心とする北東地域、一宮氏は現大阪市北区、福島区、西淀川区を中心とする南西地域を管轄していたことが分かる。おそらく海岸近辺を除く中津川を境界に分割統治を行っていたと思われる。このような又代の地域分割統治は通常、諸国守護代による郡単位の分割統治を模したもので、室町期の守護の領国経営の基本形だったのである⁽⁴⁹⁾。

次いで又代の下に置かれ、実際に荘園・田畠等の現地統括を行っていた「嶋中所々代官」⁽⁵⁰⁾について検討する。勝田・一宮氏は先述の小代官遵行状を受けて「嶋中所々代官」へ打渡状を下している。勝田賢正からは、「乳牛牧闕所分并仏性院公文職」⁽⁵¹⁾分を勝田彦四郎に、「柳嶋」⁽⁵²⁾分を竹田左近將監に、「乳牛牧之内沢田山」⁽⁵³⁾を左近將監と同じ一族と思われる竹田氏に宛てられており、一宮成実からは「福嶋村闕所分・同散在」⁽⁵⁴⁾分を北村・志岐野・足立氏に、「渡辺国分寺内平田跡」⁽⁵⁵⁾分を柴島民部丞に、「野里庄内高德庵跡」⁽⁵⁶⁾及び「浄心跡」⁽⁵⁷⁾分を西田民部丞に宛てられている。

ここに宛てられた「嶋中所々代官」は荘園、田地の年貢・段銭収取を管理し、また「柳嶋」などの不毛地、即ち湿原・荒蕪地等の未開発地の開発を行っていた。彼らが又代の下に組み込まれたということは細川氏の被官となっていたことを現わすもので、細川氏権力構造の一員として従属していたのである。

北村氏や足立氏といった「嶋中所々代官」の出自は不明であるが、柴島氏、志岐野氏は現在の大阪市内の字名が残っていることから西成郡の国人と考えられる。彼らは細川氏権力の体制に従うことで在地知行権を確保したのである。これで細川持賢は西成郡支配体制の末端に在地国人を組み入れることができたのである。

在地支配において、本来の現地統括は守護代が行い、その守護代より当該地代官（地頭）を宛行うのが通常であるが、摂津西成郡の場合は、幕府の影響力を極力介入させないために小代官を在京の京兆家内衆に任命し、現地統括者として「又代」という職制を新設した。小代官を京兆家内衆に配することで、西成郡を「幕府御料所」から自立するように一線を画したのである。そして細川氏は建立した崇禪寺の寄進地の管理を、又代を通して、末端である島中代官に当たらせたのである。これは細川氏が独自に西成郡の掌握を志向したことを表わすもので、そのため四ランクによる支配体制が創設されたのである。そして末端に西成郡在住国人を抱き込むまでに至ったことは支配体制としては整備されたといえよう。

第三章 細川氏権力と崇禪寺の結合

前節までにみた幕府、細川氏それぞれの意思による西成郡管掌システムの政策はどのように在地に反映されたのであろうか。また、それを受けた細川氏はどのような対策を実行したのであろうか。細川氏の西成郡在地掌握の具体的政策について検証してみよう。

嘉吉二年（一四四二）より始まった崇禪寺への寄進は、その後も細川持賢をはじめ、細川氏被官や在地僧からも寄進が行われ、西成郡内に限らず淀川対岸の島上・島下・豊島郡まで広がっていたことが【表1】より確認できる。摂津本郡の寄進地は文安年間に在地国人や在地僧より寄進されていることから、この頃には崇禪寺領経営が軌道にのり、安定傾向にあったことを摂津国内において認知されていた。これらの寄進地をみると崇禪寺領はどのように

【表 1】崇禅寺への寄進

年 月	郡	寄 進 地 (職)	寄 進 者
嘉吉 2 年(1442) 4 月	西成郡	乳牛牧闕所	細川持賢
嘉吉 2 年(1442) 4 月	西成郡	福島村闕所	細川持賢
嘉吉 2 年(1442) 4 月	西成郡	中島惣社領松原内	民部丞景安
嘉吉 2 年(1442) 6 月	西成郡	中島茶年貢	細川持賢
嘉吉 2 年(1442) 6 月	西成郡	仏性院公文職逆修勤行料所	細川持賢
嘉吉 2 年(1442) 9 月	西成郡	福島村内木村・遠藤・平田跡	細川持賢
嘉吉 2 年(1442) 9 月	西成郡	福島村内塚田・浦野・波佐間跡	細川持賢
嘉吉 2 年(1442) 9 月	西成郡	渡辺国分寺内平田跡	細川持賢
嘉吉 2 年(1442) 9 月	西成郡	野田村平田跡	細川持賢
嘉吉 2 年(1442) 10 月	西成郡	野里庄高德庵跡	安富盛行
嘉吉 2 年(1442) 10 月	西成郡	野里庄浄心跡	安富盛行
嘉吉 3 年(1443) 4 月	西成郡	祠堂田	永巡
嘉吉 3 年(1443) 4 月	西成郡	渡辺国分寺内幸宝寺	細川持賢
嘉吉 3 年(1443) 4 月	西成郡	中島内柳島	飯尾常進
文安元年(1444) 5 月	島下郡	吹田庄新開窪跡	細川持賢
文安元年(1444) 12 月	西成郡	中島惣社領松原内	民部丞景安
文安 2 年(1445) 8 月	島上郡	奈佐原内小塚東	賀阿
文安 3 年(1446) 8 月	豊島郡	南条棕橋東庄名田	周祥等
文安 4 年(1447) 6 月	西成郡	乳牛牧内沢田山	細川持賢
文安 4 年(1447) 6 月	西成郡	野里村地頭職参分一	細川持賢
文安 4 年(1447) 6 月	西成郡	江口内柳島	細川持賢
宝徳 3 年(1451) 5 月	西成郡	幣島内尼崎大吉右衛門跡地	長塩之能
長禄 2 年(1458) 6 月	西成郡	福島村内取出分	真願

分布し、展開していったかが明らかとなる。

持賢の崇禅寺への寄進は乳牛牧、福嶋村闕所分より始まり、続いて仏性院や渡辺国分寺、野里庄が寄進された。これらの地はすべて赤松氏被官の闕所地である。これらの地がどのような場所であったか確認してみよう。

前章で述べたように勝田氏管轄の乳牛牧や仏性院は現大阪市東淀川区域にあり、当地の推定地を比定すると、共に淀川近辺に位置していた。残り三つは一宮氏管轄地で、福嶋村は「島」字があることから、中洲から派生した地帯であることが分かり、渡辺国分寺も港湾に関わる地名であり、共に中津川の南方に位置していた。野里庄は西成郡西部の中津川と神崎川の間に位置し、その寄進地は散在田畠によって構成されるものの、中津川沿いに広がる湿地帯を新開墾田しており、その近くには尼崎・西宮・兵庫へ通じる陸路を有する荘園であった。また大阪湾河港の神崎・杭瀬の近隣に展開していることから水路・陸路ともに物資運搬の通過道として最適な地であった。

このように寄進地の場所を整理すると、すべて河川近辺に位置していたことが明らかとなる。また文安年間における摂津本郡内の崇禅寺寄進地は、棕橋東庄や吹田庄新開窪跡等であり、これらの荘園も神崎川・淀川の河川近辺に位置していた。このような事実から崇禅寺領の主要地は淀川水系を取り囲むように所領展開していたことが分かり、このことは崇禅寺に寄進した細川氏が、淀川水系の掌握に重点を置いて西成郡管掌を志向していたことを現わしている。

摂津兵庫、堺より京都への物資運搬は淀川・神崎川・中津川を利用する舟運が発達していた。それは鎌倉期に権門が、淀川沿いの上中島草苅に諸物資の運搬・管理にあたる散所を置いていたことから容易に読み取れ、川沿いに位置する「中島（西成郡）地域の掌握＝水運（淀川水系）の支配」を現わしているといえよう。細川持賢の崇禅寺に対する寄進の展開をみると、持賢は西成郡関与当初から淀川水系の掌握を念頭に入れて活動したことが明らかである。

次に陸上交通における西成郡地域をみてみよう。野高宏之氏によると、崇禪寺は三島路付近に立地していたとしている。三島路は上町台地を北上し、渡辺津から渡辺国分寺を経て、その先の中津川を越えて柴島に至り、さらに北方の宮原北庄や神崎川を通じて西国街道に通じる、南北の幹線路であった。野高氏は崇禪寺領年貢茶の全体の三分の二が、三島路沿いの莊園が負担していることを明らかにし、また、そのひとつの野里庄は尼崎への道に通ずると指摘されている⁽³⁹⁾。このように年貢茶の在所には交通路と結び付きの強い場所が多く、陸路においても崇禪寺領の支配が及んでいたのである。

このような交通の要地に寄進された崇禪寺領は当時どのような扱いを受けたのであろうか。寛正二年（一四六一）十二月二十六日付『中島崇禪寺領目録』によると崇禪寺領には「公田」や「御料所」と表記されている田地が多いことに気づく。先の野高氏は寛正二年の『中島崇禪寺領目録』を「散在する所領単位で耕地一筆毎の字地・反別・四至・石高・名請人・課役などを記した検注帳⁽⁴⁰⁾」であると明らかにされていることから、崇禪寺領は公式的には「幕府御料所」として通念されていたのである。

摂津本郡まで広がった崇禪寺領であるが、細川持賢による寄進は中島内に限られており、これらは「公田」・「御料所」とされていた。西成郡支配体制の実態は細川氏権力構造において整備されたものの、公式的には室町幕府が所有するという状況であった。それは崇禪寺領が「公田」・「御料所」とされている限りは室町幕府の影響力が未だに及んでいたことを示しているといえよう。当該期の西成郡は持賢を「御料所代官」としたように、郡全体が御料所であり、その一部を崇禪寺に寄進することで、崇禪寺領が形成されたのである。そのような政治状況のなか、細川氏は寄進した崇禪寺領の段銭免除及び知行安堵を積極的に行っている。

まず【表2】の段銭免除を見ると、文安元年（一四四四）七月二十日に勝田賢正、一宮成実宛てで小河賢家より遵行状が発給されており、これらは細川持賢の下知による段銭免除であることが明らかである。その七日後には吹

【表2】 崇禅寺への段銭免除

年 月 日	発給者	宛 所	書状形態	文書内容
文安元年(1444) 7月20日	小河賢家	勝田賢正	遵行状	中島内所々段銭免除
文安元年(1444) 7月20日	小河賢家	一宮(小笠原)成実	遵行状	中島内所々段銭免除
文安元年(1444) 7月27日	飯尾常進	長塩宗永	細川氏奉 行人奉書	吹田内新開窪跡造内 裏段銭免除
文安2年(1445) 9月10日	小河賢家	勝田賢正、一宮(小笠原)成実	遵行状	中島崇禅寺領役夫工 米免除

田庄新開窪が、京兆家奉行人飯尾常進より段銭免除の奉書が下されている。ほぼ同時に西成郡と摂津本郡内の崇禅寺領の段銭が免除されたのである。また、それを下知したのは西成郡においては「代官」持賢、本郡においては「守護」勝元であった。

次に【表3】の所領安堵についてみると、文安四年(一四四七)六月六日に六件もの崇禅寺領安堵状が下されていることに気づく。これらの安堵状では、勝元は本郡のみならず中島崇禅寺領を、持賢も同様に両郡の安堵状を発給しており、四年前の段銭免許状と大きく異なっている。このような変化は当時の幕府人事に関係があると思われる。

文安元年(一四四四)における幕府管領は畠山持国であったが、翌二年三月二十四日に細川勝元に交替し、同四年においても勝元が管領職を務めていた。また文安年間時、將軍職は三寅(後の義政)が後継者の指名を受けていたが、当時は將軍空白期で管領の「上意代行」により政務が執行されていた時期である。よって文安四年の勝元による中島の所領安堵は【表3】に記載されているように「室町幕府下知状」、換言すると管領による「下知状」ということになる。次に持賢による両郡への所領安堵はどのように解釈するべきであろうか。それは勝元家督相続後の細川京兆家の事情が絡んでくる。

勝元が家督を相続したの有力者による補佐が必要であった。先述したようにそれは十三歳という若年であり、を後見したのが持賢であり、彼は勝元とともに幕府評定細川一族を束ねていく上でも出席していた。既に文安年間時には管領勝元の補佐

【表 3】 崇禪寺領所領安堵

年 月 日	発給者	宛所	書状形態	文書内容
嘉吉 2 年(1442) 6 月25日	細川持之	崇禪寺	室町幕府下知状案	乳牛牧、仏性院公文職、福島 村内闕所・散在分寺領安堵
文安 4 年(1447) 6 月 6 日①	細川勝元	崇禪寺	細川勝元安堵状案	上郡内新開窪跡所領安堵
文安 4 年(1447) 6 月 6 日②	細川勝元	崇禪寺	室町幕府下知状案	崇禪寺領所々所領安堵
文安 4 年(1447) 6 月 6 日③	細川勝元	崇禪寺	崇禪寺領目録并室町幕府 下知状案	西成郡の寺領目録、勝元御判 の所領安堵
文安 4 年(1447) 6 月 6 日④	細川勝元	崇禪寺	崇禪寺領目録并室町幕府 下知状案	摂津上郡の寺領目録、勝元御 判の所領安堵
文安 4 年(1447) 6 月 6 日⑤	細川持賢	崇禪寺	細川持賢安堵状案	中島崇禪寺領所々所領安堵
文安 4 年(1447) 6 月 6 日⑥	細川持賢	崇禪寺	崇禪寺領目録并細川持賢 安堵状案	本郡・西成郡の崇禪寺領目録
文安 6 年(1449) 3 月30日	細川勝元	崇禪寺	細川勝元安堵状	中島崇禪寺領散在田畠所領安 堵
宝徳 3 年(1451) 5 月12日	細川持賢	崇禪寺	細川持賢安堵状案	崇禪寺領幣島内尼崎跡所領安 堵
長祿 2 年(1458) 7 月 5 日	足利義政	崇禪寺	足利義政御教書(持賢の 申請により発給)	崇禪寺領所々散在田畠所領安 堵
長祿 4 年(1460) 3 月20日	細川勝元	崇禪寺	細川勝元施行状(義政の 御判により発給)	崇禪寺領所々散在田畠所領安 堵

役ないし管領代行を務めていたのである。持賢は勝元が管領に就任すると幕府から崇禪寺領の知行安堵を得る準備をすすめた。そして勝元と持賢がそれぞれ寺領目録を作成し、寺領を安堵する幕府下知状を得た。これは幕府(管領勝元)と守護(勝元・持賢)それぞれが崇禪寺を保護認証したものであり、持賢による摂津本郡への所領安堵は「管領代による認証」を現わしたものであった。持賢が勝元管領期に幕府の安堵状を得たのは、安堵状が得やすかったこともあるが、細川氏の発給により安堵が与えられたことで摂津支配が細川氏主導によって行われていることを摂津国内にアピールする目的によるところが大きかったものと考えられる。

このような細川氏の動向を評価すると、室町幕府・細川氏双方の西成郡掌握志向

の状況下で、幕府管領職は細川勝元が、西成郡代官は典厩持賢がそれぞれ保持したままであり、又代・島中代官を細川氏被官が務めていたことから嘉吉・文安年間以降の西成郡御料所及び崇禪寺領は細川氏の主導権のもと、その影響下に置かれていたのではないかと考えられる。細川氏は幕府権力を利用しつつ崇禪寺領と結合し、これを保護することで西成郡管掌の実現を意図していたのである。

ところで、西成郡において御料所と崇禪寺領の差異はどこに求められるであろうか。注目すべきことに勝元と持賢の寺領目録及び安堵状と同じ日付に、持賢より一族の子孫・被官人に宛てた置文がみえる。

【史料4】

摂津国中嶋崇禪寺

一、当寺専可崇敬事

一、寺領百性等、雖有罪科、於彼下地者、不可^{ふべ}

一、闕所事

一、帶寺家、就寺領、不可成煩事

右條々、子孫并被官人若令違犯者、可為不孝仁之上者、可被申行罪科之状、如件

文安四年六月六日

(細川持賢)

沙弥 御判[㊟]

この置文に記される四力条は崇禪寺に対する心構え・ルールを説いたもので勝元と持賢が下した崇禪寺領安堵状に同調するものである。置文をみると「子孫并被官人」に対して書かれており、最初に崇禪寺を「専可崇敬事」と

説き、最後に「寺家」や「寺領」には干渉しないことを明記している。これは一族・被官を含めた細川氏権力組織に対し、崇禪寺への信仰の奨励と寺領への直接介入を禁止したもので、このような内容から持賢は故義教の菩提を弔うために建立された崇禪寺を、寺領不干渉を前提に細川一族の菩提寺へ昇華させたものと考えられる。この措置は崇禪寺を西成郡における京兆家・典厩家をあわせた細川一族の出先機関と位置づけたもので、崇禪寺の菩提寺化が細川氏の崇禪寺領保護をより積極的に推し進める根本的な理由として働いていたことが分かる。

細川持賢の崇禪寺領保護は先にみたように段銭免除や知行安堵等で多く関与していたが、崇禪寺に寄進されていない所領に対する関与はあまりみえない。このようなことから持賢は西成郡管掌において崇禪寺を中心とする在地掌握を企図していたことが窺える。そして、これまでにみたように崇禪寺領の形成や権限付与、また寺領が先述のように水陸交通の主要地に展開していることから明らかなように、実質的には崇禪寺が西成郡の在地支配権を有する勢力として位置付けられたのである。

嘉吉年間より始まる持賢の崇禪寺に対する一連の動きは寺領経営の優遇・保護を骨子とし、その延長として崇禪寺の西成郡支配の正当性を付与したものである。これを崇禪寺側からみると、細川氏の支援によって安定的な寺領経営が成り立っていたことの現われであるから細川氏権力の影響力は必要不可欠であった。

この両勢力の関係をみると、西成郡は崇禪寺が在地の直接経営を担うが、その権限の保証は細川氏が行っており、このことから細川氏は間接的に西成郡掌握に影響力を有していたことが分かる。細川氏が幕府御料所への管理に直接の関与をせず、崇禪寺領保護に対する動向が偏っていたのは、いわば両勢力が互いの組織体を補完しながら在地掌握を目指したからであった。そして、この両勢力の相互補完関係を強化する役割を果たしたのが島中代官である。

細川氏権力に保護された崇禪寺領には前章で述べたように在地国人が島中代官へ任官しており、彼ら国人は細川氏と関係を持つことで在地知行権や免税・得分権など、権利の保護を獲得していた。在地国人は細川氏に求心する

ことで、島中代官として荘園の年貢や段銭収取の正当性を獲得したのであるが、崇禪寺側としても在地国人の荘園代官化の動向を容認していた。それは細川氏との相互補完の一環で、在地国人との関係を受け入れ、それによって細川氏との結びつきを強調し、在地社会に対して寺領の正当なる知行者としての立場をアピールし、在地経営者として揺るぎなき地位の獲得に至ったからである。このことから西成郡の管掌者たる細川氏と在地の構成員たる崇禪寺や在地国人は相互に結び付き、新たな西成郡の社会活動の展開に関与したのである。

細川氏と在地の結合は西成郡地域の社会状況に対応するために、上部からの権限行使と地域社会との相互作用のなかで展開したのであるが、細川氏が指針した対応は、崇禪寺を媒介とすることで在地国人との結合を試みたことである。このような細川氏の在地掌握の方向性の下、在地国人は島中代官として崇禪寺領の荘園代官職を担うこととなったが、彼らはどのように位置付けられていたのだろうか。

嘉吉二年（一四四二）及び同三年に一宮成実より島中代官に宛てた打渡状が五通⁶³みえ、何れも在所を崇禪寺に寄進し、同所を「崇禪寺雑掌」に「渡付」けることを記している。これは新しく創建された崇禪寺に寺家組織が形成されていたことを示しており、同組織の下で寺領経営が成されるのであるが、「崇禪寺雑掌」等のような人物が新しく形成された崇禪寺の管理者として関わっていたかが管見の限りではみえない。だが島中代官宛ての五通の伝来を検討すると寺家組織の管理者について推定することができる。

五通は『崇禪寺支証目録』の中にみえ、同目録は藻井家に伝わる文書群（藻井美代氏所蔵文書）で、同家は崇禪寺の檀家である。⁶⁴藻井家にこのような重要文書が伝来したのは崇禪寺との関係性の深さを示唆するもので、長きに渡り崇禪寺領経営に携わる家系であったと推定でき、それが荘園制崩壊後も同寺との関係を保ち、檀家として目録が伝わり保存されたものと考えられる。このような関係性から藻井家は崇禪寺建立当初より寺家組織の編成に関わり、構成員の一員として寺領経営に携わり、且つ在地に居住する有力領主層のひとつであったと考えられる。建立

当初の寺家組織や寺領運営の安定化には在地国人の支持の取り付けが必要であり、在地層を組織の構成員として取り入れたのである。

西成郡在地国人はこのように崇禪寺家組織の構成員として寺領運営に携わったが、その一方で島中代官も同寺領の年貢・段銭収取に関与していた。先述したように島中代官は竹田・北村・志岐野・柴島氏といった面々が任命されており、西成郡における荘園代官の権限を細川氏権力より認可されていた。彼らの職掌は西成郡荘園の構成上、崇禪寺領が中心となっており、寺家構成員の職務と重なる部分が多かった。先掲の【史料4】は細川氏「子孫并被官人」に向けた置文で、崇禪寺に「専可崇敬事」を求めており島中代官も崇禪寺への関与を認められていたのである。彼らが同寺家組織に携わっていたという史料はみえないが、置文にみえる細川氏の方針や崇禪寺所有の荘園管理が島中代官と寺家運営共通の職掌となっていることから島中代官の面々が寺家組織の構成員を兼ねていたものと考えられ、このようなことから西成郡在地国人は細川氏権力と崇禪寺、それぞれの所属下に置かれていたといえるのである。細川氏の崇禪寺への結合強化の指針が、細川・崇禪寺両勢力の二重所属下という在地国人の位置付けが成されたのである。

これまでの検討から嘉吉元年にはじまる細川持賢の崇禪寺保護政策は、文安四年（一四四七）六月の管領勝元、御料所代官持賢による寺領安堵状をもって細川氏の西成郡管掌志向の結着をみたといえよう。これは細川氏の権限保証のもと、崇禪寺が在地荘園の知行権及び賦課権を付与されたもので、西成郡の直接支配権を任されたことを意味した。つまり細川氏は郡全体の最終決定権を保持しながらも在地掌握については崇禪寺を介して西成郡地域の支配を方途したのであった。これは、幕府と関わりのある崇禪寺⁶⁵に支配権を任せることで他守護家の警戒をかわしながら、確実に在地に影響力を刻み込む方策として採用されたのである。

おわりに

以上のように本稿では、嘉吉の変により新展開を迎えた摂津国西成郡に対する細川氏の関与・管掌について考察を行った。この新展開は赤松氏の没落により「闕所・西成郡」が現出し、典厩家の細川持賢が西成郡御料所代官に補任されたことに始まる。持賢の補任は摂津守護を務めながら「上意」を代行した管領細川持之と幕府方有力守護家の「衆議」による合議のもと、双方の牽制と妥協により図られた措置で、いわば通常の上意と衆議の立場が逆転した変則的「室町幕府―守護体制」により採用されたものである。この時点においては幕府方衆議の主導性により反映されたものであった。しかし、この措置により細川氏は西成郡管掌への端緒を開くことになったのである。

持之の死により上意代行を喪失した細川氏は西成郡管掌権を死守するべく「御料所代官―小代官―又代―島中代官」という四ランクの支配体制を構築し、守護代に相当する小代官に京兆家内衆の安富・長塩氏らを配した。京兆家内衆の起用により西成郡は細川氏主導による管掌色を強め、末端の島中代官職に西成郡在地国人を配置するまでに至ったことは細川氏の支配体制が西成郡において整備されていたことを示すものであった。そして、このような権力体制の整備を可能にしたのは細川氏が崇禅寺を一族の菩提寺化にしたうえで寄進や段銭免除、所領安堵といった崇禅寺保護政策を行ったことである。寄進された崇禅寺領は京都へ繋がる淀川水系や西国街道に通じる三島路沿いなど水陸交通の要衝に展開しており、流通・経済の要衝地の掌握を崇禅寺に担わせた。その崇禅寺領の荘園の管理は、細川氏に被官化した在地国人が崇禅寺家組織の構成員を兼ねながら島中代官として細川氏より権限を付与されたのである。このように細川氏は崇禅寺を媒介することで在地社会と結合し、間接的に影響力を発揮したのである。

細川氏の西成郡管掌における主導権の掌握は、守護国の讃岐・阿波・和泉・摂津本郡を含んだ大阪湾沿岸一帯の

流通・経済の掌握に一層の影響力を発揮し、幕府内において他守護家より政治的優位性の確保及び、幕府内序列の上昇をもたらす一因となった。この後、細川氏は幕府政治の中核で大きな影響力を発揮する守護家に成長していくが、それは流通・経済の重要地・摂津西成郡掌握後、徐々に効果を発揮した。西成郡の掌握が勝元期以降、細川氏が畠山氏や斯波氏等有力他守護家を凌駕する転換点となったのである。

註

- (1) 今谷明A「摂津に於ける細川氏の守護領国」(『兵庫史学』六八、一九七八年)。のちに今谷明著『守護領国支配機構の研究』(法政大学出版局、一九八六年)に収録。今谷明B「新修大阪市史・第二巻、第四章第一節」第四節(今谷明執筆、一九八八年)。
- (2) 末柄豊「細川氏同族連合体制の解体と畿内領国化」(『中世の法と政治』吉川弘文館、一九九二年)。
- (3) 森田恭二「戦国期歴代細川氏の研究」(和泉書院、一九九四年)。
- (4) 古野貢「中世後期細川氏の権力構造」(吉川弘文館、二〇〇八年)。
- (5) 天野忠幸「戦国期三好政権の研究」(清文堂出版、二〇一〇年)。
- (6) 西ヶ谷恭弘編『国別守護・戦国大名事典』(東京堂出版、一九九八年)。
- (7) 前註(1)今谷A論文。なお結城満藤(明徳三年(一二三九)正月〜同四年八月)と細川満元(応永六年(一二三九)八月〜同八年十月)の二例のみ赤松氏以外に西成郡分郡守護を務めていた。
- (8) 石田晴男「応仁・文明の乱」(吉川弘文館、二〇〇八年)。
- (9) 「斎藤基恒日記」嘉吉元年(一四四一)閏九月条。前註(1)今谷A論文。前註(2)末柄論文。
- (10) 古野貢A「中世後期摂津における細川氏の権力構造」(『地域研究いたみ』三六、二〇〇七年)。のちに前註(4)古野貢著『中世後期細川氏の権力構造』(吉川弘文館、二〇〇八年)に収録される。
- (11) 「大乗院寺社雑事記」康正三年(一四五七)二月二十一日条。
- (12) 「満濟准后日記」応永三十三年(一四二六)十月八日条。
- (13) 「看聞日記」永享五年(一四三三)九月十九日条。
- (14) 川岡勉A「室町幕府―守護体制の権力構造」(『愛媛大学教育学部紀要 第II部 人文・社会科学』三三卷一一、二〇〇〇年)。川岡勉B「室町幕府―守護体制の変質と地域権力」(『日本史研究』四六四、二〇〇一年)。両論文はのちに川岡勉著『室町幕府と守護権力』(吉川弘文館、二〇〇八年)に収録される。

館、二〇〇二年）に収録される。

- (16) ここでいう序列とは細川・斯波・畠山の三職の権力関係について限定して述べたものである。

- (17) 小川信『足利一門守護発展史の研究』（吉川弘文館、一九八〇年）。前註(2)末柄論文。

- (18) 古野貢B「室町幕府―守護体制と細川氏権力」（『日本史研究』五一〇、二〇〇五年）のちに前註(4)古野貢著『中世後期細川氏の権力構造』（吉川弘文館、二〇〇八年）に収録される。

- (19) 『斎藤基恒日記』嘉吉元年（一四四一）六月二十四日条。

- (20) 野高宏之〈大阪市史史料第七十輯〉『中島崇禪寺領目録』解題（大阪市史編纂所、野高宏之執筆、二〇〇八年）。十七ヶ所は地名で茨田郡西部の地域の総称である。

- (21) 『崇禪寺支証目録・十』嘉吉二年（一四四二）六月二十六日付・『崇禪寺支証目録十六・二十二』同年十月三日付「安富盛行遵行状案」。（当該地で二種あり。『十六』は高德庵跡、『二十二』は浄心跡である。）『崇禪寺支証目録』は前註(20)の大阪市史史料第七十輯『中島崇禪寺領目録』に収録されたもの。以下「支証目録」と略し、校正番号で記す。

- (22) 『支証目録・十八』嘉吉三年（一四四三）五月七日付「細川管領家奉行人奉書案」、『支証目録・十九』年未詳五月七日付「長塩宗永遵行状案」。（なお「長塩宗永遵行状案」は年未詳であるが、「細川管領家奉行人奉書案」が長塩宗永宛てであり、同様の内容であることから「嘉吉

三年」と断定する。）

- (23) 前註(1)今谷A論文。

- (24) 『開口神社文書』嘉吉元年（一四四一）四月十五日付「細川持之遵行状」。

- (25) 『開口神社文書』嘉吉元年（一四四一）六月六日付「長塩宗永遵行状」。

- (26) 『離宮八幡宮文書』文安三年（一四四六）七月十九日付「細川勝元遵行状」。

- (27) 前註(1)今谷A論文。前註(22)『支証目録・十八』・『支証目録・十九』。

- (28) 前註(18)古野B論文。

- (29) 前註(1)今谷A論文・今谷B執筆。

- (30) 『看聞日記』嘉吉元年（一四四一）六月二十五日。

- (31) 『支証目録』嘉吉・文安年間の『支証目録』のほとんどに細川氏権力が関与している。

- (32) 『支証目録・三』嘉吉二年（一四四二）四月二十九日付「民部丞景安寄進状案」。

- (33) 『支証目録・十二』嘉吉二年（一四四二）九月十六日付「一宮成実打渡状案」。

- (34) 『支証目録・八』年未詳六月二十六日付「安富盛行遵行状案」、『支証目録・九』嘉吉二年（一四四二）六月二十六日付「勝田賢正打渡状案」等。（この二つの史料は同様の内容。勝田賢正の打渡状は安富盛行の遵行状を受けて発行したものである。）

- (35) 『支証目録・十』嘉吉二年（一四四二）六月二十六日付「安富盛行遵行状案」（前註(21)紹介済）。『支証目

- 録・十一』同年六月二十六日付「一宮成実打渡状案」等。
- (36) 福留照尚『吹田市史・第一卷、第六章第四節』(福留照尚執筆、一九九〇年)。
- (37) 勝田賢正宛てー前註(34)『支証目録・八』。前註(22)『支証目録・十九』。一宮(小笠原)成実宛てー前註(21・35)『支証目録・十』。前註(21)『支証目録十六・二十一』。
- (38) 勝田賢正宛てー『支証目録・二十九』 文安元年(一四四四)七月二十日付「小河賢家遵行状案」。一宮(小笠原)成実宛てー『支証目録・二十七』 文安元年七月二十日付「小河賢家遵行状案」。勝田・一宮兩名宛てー『支証目録・三十一』 文安二年(一四四五)九月十日付「小河賢家遵行状案」。
- (39) 三浦圭一『新修大阪市史・第二卷、第四章第二節』(三浦圭一執筆、一九八八年)。
- (40) 前註(34)『支証目録・八』。
- (41) 前註(22)『支証目録・十九』。
- (42) 前註(21・35)『支証目録・十』。
- (43) 前註(21)『支証目録・十六』。
- (44) 前註(21)『支証目録・二十二』。
- (45) 前註(36)福留執筆。
- (46) 『支証目録・四十七』 文安四年(一四四七)六月六日付「崇禪寺領目録并室町幕府下知状案」。
- (47) 『支証目録・二十五』 嘉吉三年(一四四三)卯月七日付「一宮成実打渡状案」。
- (48) 河音能平『大阪の中世前期』(清文堂出版、二〇〇二年)。
- (49) 前註(1)今谷B執筆。
- (50) 『支証目録・三十三』 文安二年九月十二日付「一宮正真打渡状案」。
- (51) 前註(34)『支証目録・九』。
- (52) 『支証目録・二十』 嘉吉三年(一四四三)五月八日付「勝田賢正打渡状案」。
- (53) 『支証目録・十四』 年未詳七月六日付「勝田賢正打渡状案」。
- (54) 『支証目録・十一』 嘉吉二年(一四四二)六月二十六日付「一宮成実打渡状案」。
- (55) 『支証目録・十三』 嘉吉二年(一四四二)九月二日付「小笠原成実打渡状案」。
- (56) 『支証目録・十七』 嘉吉二年(一四四二)十月五日付「一宮成実打渡状案」。
- (67) 『支証目録・二十三』 嘉吉二年(一四四二)十月五日付「小笠原成実打渡状案」。
- (58) 『鎌倉遺文』七六三二。
- (59) 前註(20)解題。野高執筆。
- (60) 前註(20)解題。野高執筆。
- (61) 前註(8)石田著書。
- (62) 『支証目録・四十九』 文安四年(一四四七)六月六日付「細川持賢置文案」。
- (63) 前註(35)『支証目録・十一』。前註(33)『支証目録・十二』。前註(56)『支証目録・十七』。前註(57)『支証目録・二十三』。前註(47)『支証目録・二十五』。

(64) 前註(20)解題。野高執筆。

(65) ここでいう幕府との関わりは、崇禪寺が故義教の菩提を弔うために建立されたということに由来したものである。将軍家との縁が結ばれているため、崇禪寺は幕府からも保護されやすい環境に位置していたのである。